
ボスの秘密

高林桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボスの秘密

【Nコード】

N4784M

【作者名】

高林桜花

【あらすじ】

ザンザス×スクアーロのお話です。

入りたいって言うたら入りたいんだ！（前書き）

ザンザス×スクアーロのお話です。
ボスのキャラが・・・。

入りたいって言ったら入りたいんだ！

・・・玄関で喧嘩してる奴がいる（泣）

それは・・・

「またあの二人かよ」

「しょうがないよ。もう日常茶飯事になってるもん。」

ザンザスとスクアーロ
だった。

「ウゝオオオイ！ボスじゃまだああ！」

「俺の家だから、何をしてもいいだろ？」

ザンザスは、部屋から椅子を持ち出し、玄関先でスクアーロが入れないように、
たちふさいでいたのだった。

「そんなに俺の部屋に入りたいのか？」

「つたりめえだあ！！」

何があるかは分からないが、スクアーロはザンザスの部屋に入りがついていた。

「…そんなに、入りたいのか？…屑」

ザンザスは、睨んでそう言った。自分の部屋に入られるのが、よっ

ほど嫌らしい。

だが、スクアーロは、豪快な笑いをして、

「何かみてはいけない物でもあんのかよ?…坊ちゃまよお」

と、嫌み混じりにザンザスに言った。言った自分が、今でも吹き出しそうだった。

計画（前書き）

リアルにお部屋が気になります。

計画

「ハッ・・・俺の私物がカスごときに見せられるか。」
「！！！」

言い訳ができなかった。

ボスから見たらカスだし、私物なら・・・

「見せてもかまわんが・・・」

「なら見せろあ！！！」

ここまで言われたら見なくなる。人はそういう動物である。

「なんだよ・・・急に、殴り足りないのか？」

ガシガシと、髪をかいた。そういえば、最近、髪がパサついたような気がする。

いや・・・気のせいなどではない。自分でも分かっていた。あのボスのせいなのだ。

「本当に、ぶっ殺したくなってきたせ・・・」

含み笑いをしながら、スクアーロは、ザンザスをどうしてしまおうか、計画を立てた。

さっきまで、重かった足取りは次第に、よくなりつつあった・・・。

「よし・・・ここだな・・・」

今ボスの部屋の扉の前に立った。部屋の中からは物音一つしない。きっと寝ているか、外を眺めているのだろう。

コンコン

「カスか？」

「おう。」

「・・・入れ・・・」

飾られている部屋

「ほ、本当に、し…失礼するからな!!」

「ああ、すればいい」

微かに聞こえる、ザンザスの承諾を聞き、スクアーロは思い切つて、ドアを開けた。

「……な?!」

勢いあまつて開いたものの、そこには、自分はみてはいけない物がたくさんあるようにスクアーロは思えた。

「どうした?…カス。お前は、見たかつたんだろ?」

「ああ、そうだが…」

自分は、何と云えばいいのだろうか。自分自信の飾られているこの部屋を。

「うお・・・お・・・。」

言葉を失った。

ツツコミたいところだが、何も言葉が出ない・・・。

「どうしたカス・・・驚いて言葉も出ないか?クツ・・・まあ無理

もないな。」

ボスの部屋にはスクアーロのグッズ？が溢れていた。

「うゝ おおい！な・・・何のマネだぁ！！」

「自分の部屋は好きにしていいたいだろう？」

「うつ・・・まあだけどな、その・・・何て言うんだ？な？」

自分でも何を言っているか分からなかった。まあ無理もない。想像
していた以前

の問題だったからだ。

飾られている部屋（後書き）

自分自身が飾られてるってw
w
こわw
w

もう1回（前書き）

ルッス登場！

もう1回

「…おい、そこに突っ立っていないで、中に入ってきたらどうだ？」
ギロリと見つめてくるザンザス。スクアーロは、目があい硬直してしまった。

「ふっ、驚いて動けないってのか…所詮は、カスカ…」

「む、無志津が走るんだよ！」

「は？」

「気色悪いんだよ…！」

そう言つて、スクアーロは、ザンザスの部屋から出て行った。

「……カスカ」

ザンザスは、間抜けな顔をして呟いた。

「あの、クソボスがああ…！」

スクアーロは大声を出しながら、顔を覆い隠し廊下を走った。多分、今の自分

の顔は真っ赤だろう。

そうに決まっている。

「あ、ちょっとスクー…！」

スクアーロを呼んだのはルツスーリアだった。

「んあ？」イライラしていたので、返答なんてしなくなかったがボス以外のやつ

とは話してやろう、と思った。

「さつき洗濯していたら、スクアーロのいつもの服がないのよ!」
「なっ・・・」

戦闘の時にもいつも使うあの服。あの服がないと本当に困る。

「心当たりある?」

「いや・・・思いつかねえ・・・」まさかとは思っていたが考えた
くもなかった。

あの部屋に行くのが・・・不気味だ。

「待て、自分の部屋を見てくる」

「分かったわ」

自分の部屋にあるわけがない。
もう一度ボスの部屋に行くのである。

もう1回（後書き）

スク、ファイター！！

次回で最終話です、だっ
たはず。

ボス・・・？（前書き）

最終話ですb

ボス・・・？

「あああ！！くそっ！！」

頭をガシガシとしながら言った。少し前まで、きれいだった髪も今では、ボサボサだ。

「何でいつも、いつも」

俺は、こんな目にあわないといけないんだ！

そういいながらも、足取りは、ザンザスの部屋へと少しずつ近づいているのだった。

そうした時に、スクアーロは、考えた。絶対、次はしばいてやる、と。

この、イライラを全てザンザスにぶつけようと決心したらさっきまでの複雑な気持ちは無くなっていた。

「おい！！クソボス！！」

声を荒げ、ザンザス部屋のドアを勢いよく、開けた。躊躇なく、ノックもしないでザンザスの部屋に入った。

「ヴおおい！！ボス、いるかあああ！？」

大声でボスを呼んだ。だがボスはいなかった。

「・・・？どこ行っただ？」

いないわけがない。さっきも会ったはずだ。

「はあ・・・っ。」

「ボス」

突然、ベランダから出てきた。

「んあ？なんだカスか。ノックもしないで入るとはいい度胸してんな。」

お前の方がいい度胸してんな・・・なぜなら・・・

ボスが俺のコスプレをしていたっ

「ヴおおい・・・」

「やはりまだ髪^髪の量が足りないか・・・いや、なんか、うーん・・・

」

「もう止めてくれ・・・ボスさんよお（泣）」

ボス・・・？（後書き）

まさかのWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784m/>

ボスの秘密

2010年10月9日01時19分発行